

河村隆先生（全子連理事・元専門委員）インタビュー

◇子ども会とのかかわり

小学生になるころに地元で正式に子ども会がスタートして、そのメンバーになった。中学校に入るぐらいに、ジュニアリーダーが必要だと。それまではジュニアリーダーという存在はあまり意識されていなかった。豊浦郡豊田町（当時）のジュニアリーダースクラブを立ち上げた。同じころに山口県のジュニアリーダースクラブができたので、そこに加入した。当時は小学校が終わったら子ども会とは関係がなくなる雰囲気だったが、ジュニアリーダースクラブができたことによってずっと子ども会にかかわり続けるという選択肢ができた。

たまたま東京の大学を選んで、ジュニアリーダーの先輩が東京にいて、その頃全子連で週に1回、シニアリーダーの勉強会があった。大学生以上の大人が集まる勉強会だった。社会教育や対人関係などの本を読んだり、グループワークトレーニングの実践をしたり、KYTの元になるようなものを試しにやってみたり。KYTは全子連の伊藤彰彦先生が準備されていた。その勉強会に週1回通うことになり、それまでは子ども会を盛り上げたいと思っていたが、勉強していくうちに、子ども会だけではなく、広く社会教育、子どもにかかわることや地域にかかわることが大事であり、それにかかわる人たちはたくさんいることがわかった。より一層面白く感じて、これからも続けていきたいと思った。

◇ジュニアリーダーの現状と課題

コロナ禍によって、社会教育だけではなく、学校教育もダメージを受けた。従来のやり方がまったく通用しない。対面で何もできなくなったので、非常に停滞した。学校教育では従来のやり方から脱却して、ほかのやり方もあることが示された。プログラム自体が対面を前提に作られているので、新しいツールや方式が広く普及し、選択・定着には時間がかかるような気がする。

それに対して、子ども会活動は対面でやらないと意味がない。こういう状態のときに子ども会がコンテンツを持てるのか。各地で皆さんいろいろ試行錯誤されたが、なかなか解決策を得ることは難しかった。3年間の空白によって停滞はしたが過去の枠組みから離れて、新しい子ども会を作るチャンスだと思う。

今まであまりうまくいっていなかったことがある。例えば、例年通りの行事をこなしていればいいということではなくなったり、先輩の言うことが絶対で、先

輩の言うとおりにゲームの進行をするというようなことがなくなったりしたのではないか。今こそ無垢なリーダー達がたくさん登場している。今までうまくいかなかった部分を改善して、新たなジュニア＝本来のジュニアを育てるチャンスかもしれない。



◇ 新たな時代の子ども会

少子化なので、昔のようなマンモス校はないし、地域に行けば子ども会どころか限界集落みたいなことも多い。そういう中で人間はどうやって育つのか。人は人の間で育つ。自分も故郷に育ててもらったと思っている。そういう機能を果たすのが子ども会。子どもを中心に活動するというのは、ほかにない発想で大人中心にやるよりやりやすい面もある。

戦後のように子ども達が食べるのに困る時に求められた子ども会活動とは全然違う。子ども達が必要なものを子ども会が提供できれば。それがキラーコンテンツになって、やっぱり子ども会っていいねとなればいい。キラーコンテンツは一朝一夕には出て来ないし、見つからない。しかし、元気な子ども会はたくさんあるので、試行錯誤・情報交換していくこと。昔は「月刊 子ども会」のような情報交換ができる場があった。今はネットワークの時代なので、それをうまく使えばいいが、新しいツールを使いこなすことが難しい面がある。今、子ども会が提供すべきものは子どもにも大人にもわからない。でも、確実にある。大人も子どももジュニアリーダーも提案して、子ども達にぶつけて、活動内容をブラッシュアップしていくことが大切だと思う。(8/20 高松市にて)